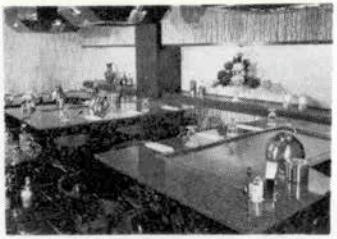
★但馬牛のステーキを〝蔓牛亭〟でどうぞ！

神仙閣のすぐ北、マルサンビルの一、二階にステーキハウス「蔓牛亭」がオープンしました。兵庫県の北部、但馬地方で育てられた但馬牛は優れた肉質と体型で世界的に知られており、別名「蔓牛」とよばれるがこの最高級のビーフステーキをこの蔓牛亭で味わえます。一階はテーブル式になっており、目の前で焼き上げられる但馬牛のまろやかでとろけるような味はまた格別。二階は家族連れや仲間同志のパーティ、同窓会歓迎会、送別会、宴会などにピッタリのお座敷で、和風づくりの落ちついた日本調ムードの中で本場の味を楽しめます。


最高の肉が楽しめる落ち着いた店内

神戸市生田区下山手通り二丁目二九　TEL三三一七九五七
年中無休　一F正午から午前一時　二F正午から午後十時

★「神戸ワイン倶楽部」へのおさそい

美味救世、そんなことばがふさわしい時代の世界の香りゆたかなワインを、料理とともに賞味するメンタルな交歓のつどい、選らばれたハイフードソサエティーと呼ぶに似つかわしい、「神戸ワイン倶楽部」が発足しました。

毎月第三土曜日（PM四時半～六時半）に例会をもち、夕食にワインを傾けながらゲストを囲んで楽しく語らいます。ゲストにはサントリースクール専任講師の堀井浩一氏やサントリーワイン室長の藤本義一氏などが顔を並べ、セミナーやレクリエーションなど催物をひらいて会員相互の親睦を深めていく新しいスタイルのコミュニケーションクラブです。

入会は随時。入会金一人二千円、同伴の場合は二人で三千円。会費は一回につき一人二千円。四月の例会は四月二〇日（土）です。

入会申込みはステーキレストラン「南蛮館」（阪急西口山側、レインボープラザビル七F）TEL三九一一三一〇九へどうぞ。

★〝千里〟満五歳を迎える

三月五日午後六時より生田神社会館四階大広間にて〝千里〟の開店五周年記念祝賀会が盛大に催された。樽本汽船の樽本さんの司会で会は進行。神戸市議会議長立花さんとクラブSのママ福島さんの祝辞、石野証券石野さんの音頭による乾杯と終始和やかに会は進められ、のど自慢による十八番も披露され、六甲興産浜田さんによる手じめまで楽しいひとときがもたれた。

あいさつをするママ

★〝雑貨屋〟が移転

洋酒ハウス〝雑貨屋〟が満一周年を期に三月十五日元の〝仏蘭西屋〟の場所に移転、ハイセンスな店として面目を一新した。

●神戸うまいもんとドリンキング

★スペインの味とフラメンコの店

エル・ヴィノ
生田区北野町三丁目四八
アニルドマンション1F
☎二四一―一三四四

アンダルシアの夜をあなたに――。今日はエル・ヴィノの夜をステキに彩るプレイヤーを御紹介しましょう。日曜日は向田俊博（フラメンコ）、月曜日は平島謙二（クラシック）、火曜日はペペ藤塚（フラメンコ）、水曜日は定休日、木曜日は奥田大二郎（フラメンコ）、金曜日はまたまたペペ藤塚。そして、第一・三土曜日にはなやかなフラメンコ舞踊のショータイム、第二・四土曜日は内崎勇によるドブロギターの演奏となっております。あなたもエル・ヴィノで一宵をお過ごしになりませんか？

5・00PM～2・00AM（日曜祭日は12・00AMまで）

華麗なフラメンコの一宵

▲ママをかこんで祝賀会に集った面々
生田会館４Ｆホールにて

三月五日の祝賀パーティには御多忙のなかを多勢の方々にお集りいただきありがとうございました。おかげさまで本当に楽しいひとときを過ごすことができました。これからも変わりませぬお引き立てを何卒よろしくお願いいたします――――阪本千里

CHISATO

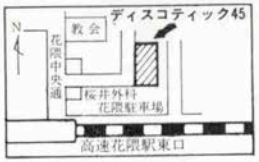
生田・東門筋東新ビル地階
☎（331）４７３０

DISCOTHEQUE

45

OPENS(weekday) ● 8：00p.m. CLOSES ● 3：00a.m.
OPENS(holiday) ● 6：00p.m. CLOSES ● 2：00a.m.

12時までワンドリンク 女性800円 男性1000円
毎週月曜日定休 （祭日と重なる場合は火曜日）



花隈中央通り45 ☎341・2845

市街地の雑踏を離れた神戸の山の手、加納町にフラメンコの店**ブルーリボン**がある。こじんまりとした店内に一歩入れば、情熱的なカスタネットをかき鳴らす音とギターのリズムとで、たちまち、魅了されてしまう。毎週金曜日の夜には三回（8時、9時、10時）フラメンコ舞踊を舞台でやっていて、マスターのギターと、目にも彩やかなフラメンコの乱舞は思わず息をのむ素晴しさである。飲み物、軽食もいろいろとあり、スペイン情緒をたっぷりと味わえる。この6月1日に17周年を迎えるブルーリボンはフラメンコムードいっぱいの店である。

セリー酒（ワイン） 350円
トルテージャ（オムレツ） 450円
営業時間 6：00PM～12：00AM
第3日曜は休み

☆フラメンコギター教室
火曜・金曜・日曜の3：00PM～6：00PM 初心者歓迎

フラメンコの店 **ブルーリボン**

加納町3丁目交差点西20米上ル ☎241・8679

神戸百店会だより

★あこや亭本店が新装、広く便利に

本格的な讃岐手打ちうどんが名物のあこや亭本店が広くなり、3月5日新装オープン披露パーティが開かれました。

新しく増えたのは、2階の小部屋五つと、八十名収容の大広間で、今までの三倍の大きさになります。

献立も鍋ものの種類が多くなり、手打ちうどんと季節の野菜、魚貝類を煮こんだ特製あこや鍋二〇〇〇円カニスキ二〇〇〇円、しゃぶしゃぶ二五〇〇円など。また、古い時代、山で狩りの後、獲物を石の上で焼いて食べたという風習にちなんだお狩場焼き二〇〇〇円が珍しい。駐車場も広くなって便利。

葺合区旗塚通七―五

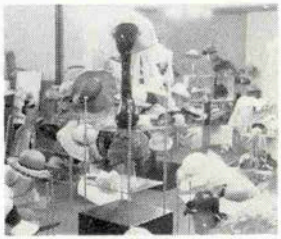
☎二三一―六三〇〇

新装オープンのあこや亭

★春から初夏の婦人帽子創作発表会――マキシン

全国的に有名な婦人帽子の店マキシンが、3月5、6日と、オリエンタルホテルで春から初夏の婦人帽子'74創作発表会を開催しました。会場いっぱいに開いたオリジナル帽子は約二千点。おしゃれミセス、ヤングレディ向のタウンハットは誰にも愛用できるものから本格的なものまでありグッとカラフル。また、実用性にファッショナブルなセンスを取り入れたゴルフ、テニスのカジュアルハットが目立つ。つばが狭くなってつばに変化をもたせたシックな帽子が今年の流行。飾りも帽子と共材料でワンポイントに使い、素材も軽い感じを与えるものが新傾向。お値段は三千円から三万八千円まで。八千円台がよく売れているそう。

「リゾートハットをかぶる機会が日本でも多くなり、かぶる習慣が定着してきたため帽子の需要は増えそうです」と、関係者も意欲的で、マキシンファンは多い。この日展示された作品は有名百貨店、トアロード本店にあります。



カラフルなタウンハット

★朝（あした）――ミキモト春の特別展示会

品質で定評のあるミキモトが、恒例の春の特別展示会を3月11、12日にオリエンタルホテルで開催。朝（あした）と題した、白のイメージによるWGやダイヤをあしらった新作は、今シーズンのファッションに調和する清々しいもの。昨年までは金が主力だった宝石界に白を持ちこんだミキモトの意欲的な展示会でした。

●ショップトピックス

★三宮センター街にある美術陶器磁の店**淡洲堂**の2階ギャラリーで2月28日から3月5日に第一回橋本嘉峯作陶展が開かれました。今回の個展は小鉢や小皿、デミタスなどの食器中心で、渋く落ち着いた作風に人気が集まり、売れ行きも好評。橋本嘉峯さんは35歳という若い新人で、多くの可能性を持った人であり、これからの作品も期待されそう。彼の作品を扱っているのは神戸では淡洲堂（TEL 331―8758）だけです。

★神戸大丸前にあるオートクチュール**装苑**の春から夏にかけてのファッション展示会が、3月5日ニューポートホテルで開かれました。ショッキングピンクやブルー、グリーンなど明るいきれいな色が今年は流行るといわれているが、このショーでも、全体にクリアな色が目立ち、柔かいブルーのロングドレスを着たモデルさんが登場すると、その優雅さに場内で喚声がもれました。

★さんプラザ2、3Fにある**三愛**三宮店で、3月15日この春卒業するフレッシュレディのためのファッションショーが開かれました。カジュアルドレスやブラウス、スカート、パンタロンの組合せ、ギャザー、フリルのあるドレッシードレスから春のコートまで30点が紹介され、フレッシュレディのおしゃれプランに役立ててもらいたいもの。ショーのおわりに抽選があり、国内旅行航空券（4万円相当）や国鉄旅行券（1万円相当）が25名にプレゼントされました。

★婦人・紳士服飾**セリザワ**の本部電話番号が、3月5日より（078）321―6868（大代表）に変りました。

★3月1日より美容室**ローズあきら**では腕をみがいた若い男性スタッフ3人が、水曜、木曜の二日間を担当しヤング対象の店にきりかえてスタート。料金もヤング向きにお安くしてあるとのこと。営業時間9AM～6PM。

ポケットジャーナル

★第一回井植文化賞受賞者決定

三洋電機株式会社の創設者である故井植歳男氏が逝去されたとき「社会への還元」ということで10億円を寄贈、これが基金となり財団法人井植記念会がつくられ、昭和四十四年より社会福祉、教育文化の事業に援助が続けられていた。

この記念会で本年度より文化賞が創設されることになった。井植文化賞は五部門が設定され、各部門ともに有力な専門家により選考され受賞者が決定し、三月二十一日、井植記念館（塩屋）で受賞式が行われた。

各部門の受賞者には正賞、賞状、ライオンブロンズ像、副賞として賞金二十万円が贈られることになっている。

●文化芸術部門　河口龍夫
現代芸術の分野で国内海外でのめざましい活躍。

●社会福祉部門　福来四郎
全盲児童を対象にした特殊教育に貢献。

●地域活動部門　城崎郡日高町赤崎地区区長　森田康雄
セカンド・コミュニティ構想による丸山地区との交流の中での活動。

●報道部門　神戸新聞・ラジオ関西
「あなたの愛の手を」全国に先がけて里親運動のキャンペーンを実施、両社で積極的に展開。

●科学技術部門　桜井春輔
岩盤力学の研究による六甲山トンネル工事への貢献。

★ニースと神戸がおまつり友好親善

ニースなどフランスのフートダジュール地方と親交を深めようと四年前から交換使節を派遣してきた神戸新聞社などから、今年はニースカーバルへまつりの親善使節として兵庫県美方郡温泉町の傘踊りグループ、鉄砲光三郎、望月美佐グループなどが参加した。三月十六日から十日間、ニースのカーニバルは大変なにぎわいをみせるが、パレードなどに加わった日本からのグループは当地で非常な人気を集めた。

また五月には、ニース地方の民族舞踊団「チャマダ・ニッタルダ」三、四十人が来日、神戸まつりに参加し花を添える予定という。

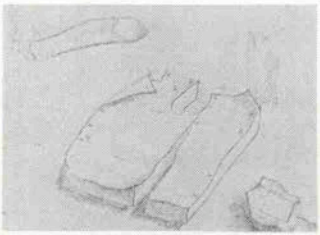
★花柳芳五三郎さん「師籍30年記念舞踊会」開く

四月六日七日、神戸国際会館大ホールで、花柳芳五三郎さん（兵庫区福原町74ノ34☎575四六三六）が、師籍30年を迎え記念の「五三郎会」を開く。特別出演花柳流家元寿輔、五世花柳芳次郎芳松、楽瞠師ら。（入場券一八〇〇円）

★近代洋服発祥の地顕彰碑が東遊園地に

近代洋服発祥の地として由緒ある神戸だが、明治2年英国人カベルが東遊園地周辺の元居留地16番館に開店したのが神戸洋服の発祥だといわれる。神戸洋服商工業協同組合（渡辺利雄理事長）では、洋服着用大政官令発令百年を記念して日本近代洋服発祥の地顕彰碑を東遊園地に建立する計画を進めている。

製作にあたる彫刻家グループ「環境造形Q」（山口牧生さん代表）のデザイン構想は、前身頃、袖ぐり、



洋服発祥の地顕彰碑構想図

誕生日ありがとう運動

★あなたもボランティアに

誕生日ありがとう運動は、すべてボランティアによって企画、運営しています。

あなたも、あなたの余暇をボランティアとして活動してみませんか。ボランティア活動は、いきわめて人間的で日常的なものです。誰でも参加できます。

とかく人間疎外におちいりがちな現代社会で、ボランティアとして主体的に動くことによって自分の生き方を考え、自分自身が成長し、人間的に豊かな人間性を回復する運動でもあります。

ボランティア活動は、本運動とは、全部で活動する各地域社会で活動する「地域社会ボランティア」が、約五百名登録して運動を推進しています。

具体的には……

○自由で自発的な活動は、精神薄弱児の頒布、全国発で、啓発用機関紙の頒布、古切手のボランティアとの交流、古く長く」

○現在の登録者は中高校生、大学生、勤労者、主婦など

○もちろん入退は自由

○ボランティア年間登録料五百円（運動のしおりなど購読料と毎月の連絡など）

○ボランティア希望の方は本部へ

★誕生日ありがとう運動とは

精神薄弱児（者）の啓発運動です。誕生日のお祝の中から意識的に百円節約して献金する。各家庭でもつ。この問題について話し合う機会をたくさんのことを手がかりとしてすべてが精神薄弱児（者）をかこむ雰囲気を広げることと同時に、かくひとりひとりと思いのなかで、命につながる誕生日を有意義にしようという運動です。

誕生日ありがとう運動本部

神戸市葺合区御幸通八の九の一神戸国際会館（郵便局の前）（二五一）八一六一内線316

ベストに裁断された形をモチーフにしたもので、本体の長さ3m、幅3m、袖が2、7m、高さ40cm、「洋服組合の皆様の神戸洋服の伝統と技術に対する愛情と誇りとを表現」するもの。秋には完成の予定。

★第二回　金山平三賞を石阪春生さんが受賞

昨年から県立近代美術館が制定した金山平三賞は、兵庫県美術祭に招待された洋画家の中から一人選ばれるもので、県下の美術賞の中では最高といわれているが、昨年の受賞者松本宏さんに続いて今年は石阪春生さんが選ばれた。

受賞の「女のいる風景」は女の横顔を軸に衣装、草石などをアラベスク風に描いた作品で、淡い繊細なタッチが幻想的な雰囲気をたたえている。

石阪さんは関西学院大学経済学部卒。一九六七年に新制作会員になり、毎年個展を開き、細く薄い独特な油絵技法は洋画壇のなかで高く評価されている。

★筒井康隆さん奮闘扁出版
SF大会も来年神戸で

神戸在住のSF作家で、最近大変人気のある筒井康隆さん。その一人十人全集と銘うたれた「暗黒世界のオデッセイ」が出版され、これまた話題集中とか。

正気と狂気の間、ヒステリー大行進と乱調人間大研究。父嘉隆さん、淀川長治さん、山下洋輔さんとの対談。本誌神戸っ子に掲載されていたMY・KOBEなど筒井さんの巾の広い魅力実力が満載され楽しい。それにオモシロオソロシイ漫画がすごい！

また来年のSF大会は神戸で開催されることがほぼ決定となった。これは筒井さんや神戸の若いSFファンが中心になって運動を進めているもので、SF作家によるパネルディスカッション、SF映画、SF芝居など神戸文化ホールで八月に堂々二日間行なわれる予定という。

筒井さん大奮闘。

★海文堂書店の増築店舗が20日オープン！

元町3丁目にある海文堂書店が、本店に隣接して文庫、雑誌、レジャーの総合店を増築中で、4月20日（土）に完成予定。従来の専門書店の海文堂というイメージを一新した若さ溢れる新しい海文堂が誕生する。それを記念してオープニングセールが左記の予定で催される。

●4月20日（土）午後1時
SF作家筒井康隆さんサイン会
●4月27日（土）午後1時
作家田辺聖子さんサイン会
●4月28日（日）午後1時
幼児教育相談コーナー（専門家によるカウンセリング。これは今後も毎月第四日目に常設）
●4月20日（土）～5月11日（土）
ビジネスマン必読書大展示即売会
●5月1日（水）～12日（日）
児童書まつり（紙芝居、チビッコプレゼントデーなど楽しい企画がいっぱい）
●5月3日（金）
子供読書相談コーナー（作家の丸川栄子さんが読書案内）
●5月5日（日）漫画家丘あつしさんがマンガをプレゼント
●5月12日（日）～20日（日）
文庫まつり

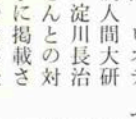
★あなたも創作活動を！

文化都市づくりを推進する神戸市が、市民の文芸活動を奨励し発表の場を設けるため、神戸市民文芸集「ともづな」を発刊した。

これは昨年までの「勤労者文芸集」を発展させ、ひろく一般市民を対象に作品募集をしたもので、詩、短歌、俳句、川柳、小説、随筆、評論、戯曲の八部門に分かれている。創刊号には七〇七人、二五一一点もの作品が寄せられ、厳しい選から選びぬかれた優秀な作品が掲載されている。

第二号の作品応募締切は今年9月14日。市内に居住または勤務就学する人は誰でも応募できる。文芸集と合わせて市民美術展も行なわれている。詳しくは神戸市市民局余暇開発課まで。☎三三一―八一八一。

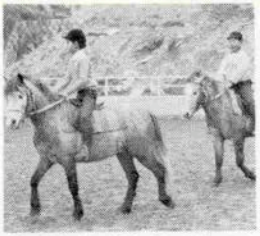
美術ガイド



★兵庫県立近代美術館
小林清親版画展　4　2～4／21
★白鶴美術館
季朝の陶磁　3　15～4／21
★南蛮美術館
南蛮画と紅毛画　4　5～5／26
★大丸百貨店四階美術画廊
18・19世紀近代ヨーロッパ絵画展　4　4～4／9
現代日仏画家フランス風景展　4　11～4／16
近代・現代巨匠版画展　4　18～4／23
★そごう百貨店六階美術画廊
元川嘉津美油絵展　3　28～4／3
和田行雄水彩画展　4　5～4／10
小山冨士夫・岑一父子作陶展　4　12～4／17
横塚　繁油絵展　4　19～4／24
★さんちか広場
春の動物フェア　4　4～4／9
ピクワール手芸展　4　11～4／16
古流松藤会近畿連合支部展　4　18～4／23
'74サマーカーニバル　4　25～4／30
★ギャラリーさんちか
神戸風景画・藤本郁一個展　4　4～4／9
ギャラリーさんちか三周年展　4　11～4／16
新書人連合展　4　18～4／23
上野長雄遺作展　4　25～4／30
★KCCギャラリー
「雪幻」石川道夫写真展　4　4～4／23
★KCCアートギャラリー
神戸洋画会小品展　4　2～4／14
永沢　昇陶芸展　4　16～4／29
★安田画廊
佐野小太郎個展　4　9～4／14
グループ渦展　4　17～4／21
★ギャラリー新光
河井佐枝子手織タピストリー展　3　30～4／27
カガミ油絵個展　4　6～5／3
美作家集団展（未定）　4　13～4／26
山田文宏油絵小品展　4　20～4／19

★チビッ子乗馬でオリンピックめざせ！

日本の乗馬がオリンピックでいい成績をあげられないのは、子供の頃からの訓練がないからだとハッパをかけられて、日本ポニーKK（神戸市兵庫区有馬町射場山一七四〇―三）が、カナダよりポニー50頭を、一機チャーターして購入。調教師は日本的な矢野純一郎さんで、馬の販売のほかに、チビッ子（小学校～中学生迄）たちのための有馬ポニークラブが誕生して4月で1周年を迎える。子供たちは乗馬だけでなく、世話も教わり馬と仲良しの生活を、日曜日ごとに行っている。現在会員は20名。（☎904・三〇四四）



ポックリ、ポックリ。お馬に乗って。

★竹村まことあらかると展

腹話術や司会で活躍している竹村まことさんが、2月13日から19日までKCCギャラリーで「竹村まことあらかると展」を開いた。

展示されたのは文楽人形の頭、マリオネットのピエロ、紙人形の魔法使い、コブタの指人形などの人形や書、生け花、クレヨン画、墨絵、写真と書を合わせたものなど意欲的な作品ばかりで、その多芸多才ぶりにはびっくり！

いろんなことに興味を持ち、なんでもやってみたいという竹村さんは「日の目をみない作品を埋没させないことも大切じゃないかと思い、楽しい遊びの個展をやってみたかった」そうだが、バラエティに富んだユニークな個展であった。

竹村さんの多才ぶりにびっくり！

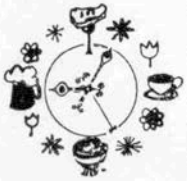
★**プレゼント当選者発表**

二月号、ファッション・アイのセーターは次の三名様が当選されました。

中里安佐子様
九十九裕紀子様
大下絹子様

長田区
葺合区
須磨区

花時計



★井植文化賞の設定

「私はゼロから出発した人間なのだから私財の一部は社会に還元してお役にたてて欲しい」というのは三洋電機の創設者故井植歳男が逝去のときの願いであり、その言葉どおり、時価十億円という三洋電機の株が社会に寄贈された。

これは、昭和四十四年のことである。現在、財団法人井植記念会として活動しているが、この記念会で今年度から文化賞が設定されることになった。文化賞は五つの部門に分かれている。文化芸術部門、社会福祉部門、地域活動部門、報道部門それに科学技術部門である。

ほんとうにユニークな部門の設定である。とくに受賞の対象者が兵庫県下にしぼられているのだから一層きめ細かい選考になり地域社会に大きな貢献を果すことができるだろう。

文化賞が多過ぎるのではないかという意見がないではない。しかし元来、文化不毛の地などと呼ばれていた神戸である。

筆者などは、文化がどしどしマスコミにとりあげられ、いろいろな人たちの労苦が日の目をみるのだから文化賞はどんなに多くても過ぎることはないと思うのである。

（Y）

KOBE POST

★画家の**西村功**氏は、三月二十六日神戸を発って、パリに旅立たれました。奥さんとお嬢さんもご一緒で、一年～2年の滞在とのこと。

★画家の**中西勝**氏の個展が大丸四階美術画廊で四月十一日～十六日まで開かれています。また、新居が三月一杯でやっと完成。もらい風呂からようよう脱却。

★新制作の**石阪春生**氏の大阪フォルム画廊での個展が延期され、4月1日より10日迄開かれています。

★5月14日～19日京都ギャラリー16で**植松奎二**さんが個展を開きます。秋にはヘルシンキのギャラリー、チープ・スリルで個展を開く予定。

★詩人の**竹中郁**氏のキミ夫人が亡くなられ、満中除志として、故人が多年関心を寄せていた小野易子女史経営の社会福祉法人レパノンホーム（高槻市上土室）双方の事業基金に香資を寄附されたとどあいさつのお便りがありました。ご冥福をお祈りいたします。

★書家の**望月美佐**さんが、三月二日ニースのカーニバルより無事帰国。このほど鳳美社では、新スタッフに**田谷美江子**、**新垣蘭子**、**内野睦子**、**小谷洋子**、**森信子**、および**コピーデザイン**担当に**藤原明子**さんらが加わり再発足。四月には東京銀見区幼児開発協会書道教室を開講、五月二十六・七日は、関西本部鳳美社展を神戸文化ホール3階で、望月美佐リサイタルを同中ホールで同時開催されるとか。

★4月16日～21日「**村上翔雲**書作展」京都・四条河原・祈説の「シーホース」画廊のオープン記念の催しがあり、**伊丹三樹彦**、**平松治子**さんらの俳句・その他30点が飾られます。

諸国民芸品

大阪 つかもと

卸・小売
民芸店開設相談
催事企画

本　店　〒545 大阪市阿倍野区阪南町5丁目16-9
（地下鉄西田辺駅二筋西入スグ）
TEL　06(621)1621・(623)7892
心斎橋店　TEL　06(245)1312(PARCO5F)
中百舌鳥店　TEL 0722(59)3811(ダイエー中百舌鳥店2F)
京　都　店　TEL 075(231)2910(三条木屋町西北角)

福祉時代の幕開けです
待望の
親しみやすい
福祉を考える本です

Welfare Institutions in the World

世界の福祉施設

欧米の心身障害者を訪ねて

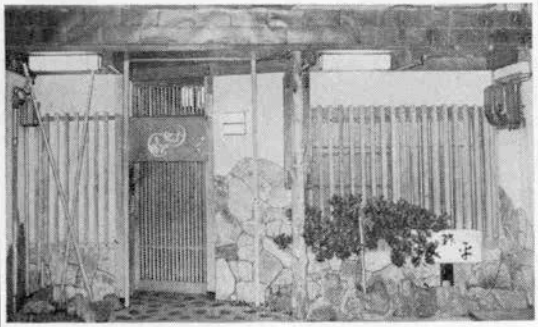
橋本　明著

定価 1,000円

＊　福祉とはなにだろう……そんな疑問に、福祉は専門家だけが考える問題ではない。市民の日常の中で考えようと語りかける……
貴重な福祉の道しるべになる好著

お申込みは
神戸市生田区東町113の1大神ビル8F　(有)月刊神戸っ子
大阪市北区梅ケ枝町80梅新東ビル7F　(株)オール関西

鮒の又平



神戸三宮生田ノ社ノ西　電話(331)0935

おすしてんぷら　榮彌

本店　大丸前・三宮神社東
TEL(331)5772
5673〜4
(毎週水曜日休み)

支店　さんちか味ののれん街
TEL(391)5233
(第3水曜日休み)

営業時間
A.M.11.30〜P.M.9.00

SPRING KOBE SHOPPING

やっぱりうまい
むさしのとんかつ

トンカツ

コーベ・三宮
ムサシ

でんわ・331—三七七一
321—〇六三四
321—〇六三五

★ちゃんこ鍋でモリモリ力を
★とにかく遠慮はせずに
ダイナミックに食べよう！

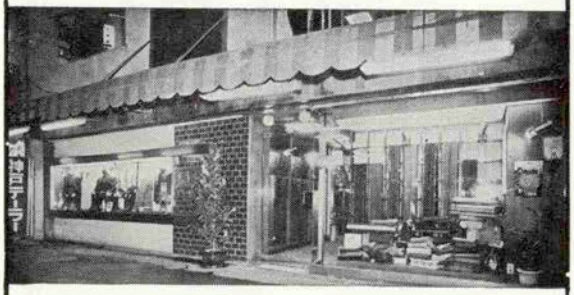
さんちか味ののれん街

悟味西

営業時間　11:00AM〜9:30PM
定休日　第三水曜日
☎　(078)391−5319

高級紳士服専門店

神戸テーラー



さんちかメンズタウン　　TEL(391)0388
生田区北長狭通2(阪急西口)TEL(331)2817・3173

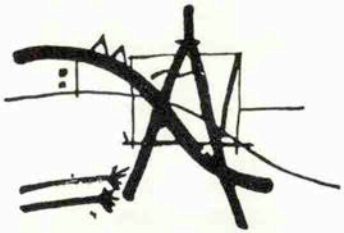
べっ甲美術品とアクセサリーの専門店

太田鼈甲店

元町1丁目　TEL(331)6195

SPRING KOBE SHOPPING

額縁絵画・洋画材料
室内工芸品



末積製額

三宮・大丸北
トア・ロード
331-1309・6243

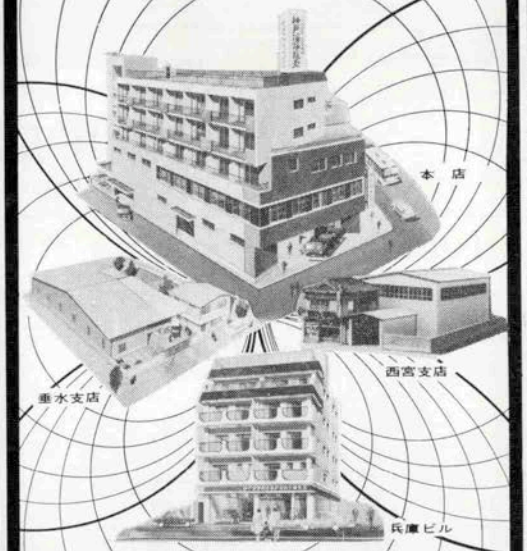
ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを！

三恵洋服店

元町4丁目　TEL(341)7290

乾

お酒の殿堂



酒類調味食品問屋

神戸酒類販売株式会社

取締役社長　高田英之輔

本　店 650　神戸市生田区中山手通1丁目76
電話神戸(078)321—0201(代表)

■垂水支店　■西宮支店　■兵庫ビル

元祖 焼たこ

おいしさが
口いっぱいに
ひろがる……
本場の味

ばたなち

■三宮センター街柳筋店
TEL　321—3446・331—0572
■新開地店
TEL　576—1191
■平野店（平野市場内）
TEL　361—0821
■三宮センター街サンプラザビルB₁
TEL　391—3793

連載小説

まだ遅くない

葉月一郎

え・小西保文

あらすじ　昭和四十五年秋――。毎朝新聞神戸支局の**戸波峻**記者は、地元の大手企業兵庫製鉄の公害キャンペーンに加わるよう**石津**支局長に命じられた。新聞のむなしさを知り仕事に意欲を失っていた戸波は、これを断ってバーの女**ユカ**との情事に耽れてゆく。だが、ある朝、ユカの洗濯もの一面に付着している工場のばいじんを見た戸波はキャンペーン参加の決心をする。

七人の記者を中心に取材スタート。支局長らは**和久井**社長にも会見を求める。一夜、かつて偶然知りあった兵庫製鉄秘書課の**細川亜紀子**に誘われた戸波は、同社の**花房**総務部長に紹介される。亜紀子はその夜、須磨海岸まで戸波を連れ出し、社長が議論のすえ条件つきで会見に応じることにした、と打ち明ける。

〈7〉ある衝動

予想通り、といえば、まさにその通りである。

社長会見には応じる。むしろ逆手をとって、この機会に大いに会社のPRをやる。同時に裏側から、毎朝新聞の企画そのものをつぶすよう働きかけてゆく。

つまり公害キャンペーンをすりかえて企業の宣伝に利用し、あとは〝なし崩し〟に消してゆこうというハラなのだ。

（くそっ、負けてなるものか）

戸波は、軽く唇をかんだ。

真近に、大胆なポーズで横たわっている亜紀子を、まるで仇敵のワラ人形でも見る眼付きで眺めた。

海が凪いできた。いつの間にか波がオクターブを下げている。

ふと、疑問がわいた。

「君は、なぜ、そんな会社内部の裏話を、おれにしゃべる気になったんや」

「……」

答えは、なかった。

だが、その視線はキラキラときらめきながら戸波の瞳の奥をとらえて離さない。

「君は、会社を裏切っていることになるんだよ。どうして、そんな…」

さえぎるように、亜紀子の両腕が伸びてきた。それは戸波の首をゆっくりと、そして固く抱えた。

眼が、閉じられた。唇が、かすかに開いた。腕に、力

がこもった。
規則正しい波の音が、また少しずつ高まってきたようにも思える。あるいはまわりが静かすぎるせいなのか——。
月あかりを戸波の上半身がさえぎり、亜紀子の頬は白さを失っていた。灰色の砂にそのまま溶けこみそうな暗さである。その、にぶい闇が、戸波の理性を消した。
かすかに、唇と唇が触れた。経験したことのない香水のにおいが、鼻をくすぐる。
亜紀子の腕に、ひときわ力がこもった。
唇が、重なる。
静かに、そして次第に荒々しく、くちづけが続く。
濁った意識の底で、戸波の舌は女の真意をさぐり求めるように這った。
組織をあげて、あなたたちを切り崩します、と女はいった。その宣戦布告と全く同時に、女は組織を裏切ることばを吐き、戸波を求めた。
これは、何ということなのだろう。
愛情、とは思えない。ワナ、にしては女自体、多くを失いすぎている。
単なる衝動であり、もののはずみの冒険（アバンチュール）と片付けるにしては、二人の立場の持つ意味が深すぎるようでもある。
それにもまして、戸波自身の行為は、何なのか。
愛ではない。好奇心ともいえぬ。酔ってもいない。
「据え膳くわぬは男の恥」ということばがある。それに当てはまるのではないか。
ふと、どこからか声がした。
「黙ってたら、世の中、ちっともよくならへんのやわ」
それは、ユカのつぶやきに似ていた。そして、幻聴のように、瞬時に消えた。
はじかれたように、戸波は立上がっていた。砂を蹴って、波打際へ走った。靴のまま、ぬれるにまかせて水に入った。
黝（くろ）い海水を掌にすくい上げる。顔をゴシゴシと洗う。
何度も繰返す。
波の旋律だけが、耳に届いた。
頬にまとわりついていた亜紀子の熱い吐息が、流れ落ちてゆく。そして、戸波自身の欲情も、叫びを上げながら剝（は）がれ落ちた。
あのくちづけが衝動なら、不意にそれをやめたのも衝動に過ぎぬ、と戸波は思う。
ありきたりの倫理感なんか、もともと、ない。職業意識がそうさせた、とも思えない。
しいていえば、もうしばらく、距離をおいて亜紀子を眺めていた方がいい、と突差の判断が働いた、ということか。
亜紀子は、もとの位置に、そのままのポーズで横たわっていた。戸波の首にからんでいた両腕は、砂に投げ出されていたが…。
ワンピースのすそは、ひどく乱れたままである。まるで失神したように、眼も閉じている。もし人が通りあわせたら、暴行された変死体とカン違いするのではないか。
足をとめた。じっと見おろす。
気配に気づいたのか、うっすらと亜紀子が眼を開いた。
表情は、動かない。
静かに起き上がる。
「もう何時かしら」
そんなつぶやきを洩らして、歩きはじめた。
（この女は、なにを考えているのか）
あとに従いながら、首をひねる。
かまわずに国道へ出ると、亜紀子はタクシーをとめた。さっさと乗りこむ。ドアが戸波の鼻先で勢よく閉まった。
「おやすみなさい」
何事もなかったような軽やかな声。都会のにおいそのものの排気ガス。その二つが重なりあって戸波の上を通りすぎた。
笑顔だったか、硬い表情だったのか、それは定かではない。ガラス越しの頬の白さだけが、瞼（まぶた）の奥に残った。

コークスを満載したトラックが、砂けむりを巻き上げて走り過ぎる。距離を置かずに、三台、四台…。
白兵戦が終った直後の原野のように、表通りはしばらく砂けむりに占領された。
田んぼ道に舞い上がるそれとは、明らかに違う。赤茶けて、ねばっこい。ノドを刺すような、いがらっぽいにおいもした。
その砂ぼこりが落ちつく間、金原祐介は口を閉ざしていた。しゃべったら、無数の雑菌が口から入ってくる。だから、沈黙するのだというような、かたくなな意志が眉の間にみえた。
「こりゃ、ひどいですねえ」
どこか迎合するような口調で、松岡記者が金原をのぞきこむ。
「あのトラック、兵庫製鉄の工場から出てきたんでしょう」
軽く肯くと、金原は松岡と、その隣りの戸波に等分に眼をやった。
「もう、慣れたけどね」
立上がった金原は、玄関口へ近寄り、戸外をみつめた。
兵庫製鉄の工場は、歩いて五、六分のところにある。あまり近すぎて、例の巨大な煙突群が目にとまらないほどの距離である。
だからこそ、工場からの降下ばいじん、亜硫酸ガス、騒音……と、この地域は被害をまともに受けている。
「車の屋根にこびりついた赤い鉄粉が取れない。鉄粉は兵庫製鉄の煙突が吐き出したものだから、会社は洗車代として八百円を支払え」
地元の畳屋にすぎない金原祐介が、こういって兵庫製鉄へねじこんだ、という話を聞込んだのは松岡記者である。
会社の壁は厚い。二度、三度と交渉を重ねても、ラチがあかない。
「なるほど鉄粉は、うちのものでしょう。しかし、それだからといって、洗車代をお払いするというのは、どうも…」
一度払えば、際限がない。金原ひとりでおさまらない。洗車だけでなく、洗濯代から医者代まで、要求のひろがるのは目にみえている。——これが拒否の理由であろう。
あらためて、二人の新聞記者の訪問を受けた金原は、口数が意外に少なかった。
「このままじゃ、解決のメドは立たんのではないですか」
金原は、松岡記者にゆっくりと視線を移し、もう一度戸外へ目を向けた。
「あした、市役所へシリを持ちこむことにしたよ」
「え？　市役所…」
「そう。和解仲介申請って奴でね。こんどの公害防止協定に、その条項があるんや」
ただの畳屋ではないな、と戸波は受けとめる。おそらく、民商組織に加わっているに違いない。
民商——民主商工会。共産党の指導で結成され、商店主を中心に、反税闘争などでこのところ組織をふくらましてきている団体といわれている。
戸波の思惑をよそに、金原ははじめて微笑をみせた。意外に人なつこい笑顔だ。
「私ら、住民はね、いままで兵庫製鉄に迷惑かけたことないよ。そやのに、なんでこんなに私らが公害をモロにかぶらにゃいかんのや。こんなときこそ、一人ずつが、いろんな形で、声をあげていこう。それしかない、いうとるんや」
ユカのいったことばと、これは同じではないか。（黙ってたら、ちっともよくならへんわ）
まだ確かではないが、少しずつ、目にみえぬところから芽が頭をもたげてきている——。そんな実感が、戸波にもわいてきた。
バーのホステスであろうと、政党関係者であろうと、

それは問題ではない。必要なのは、この街に住む一人ひとりの意識だ。
(おれも、だんだん支局長に似てきたかな)
苦笑をかみ殺して、金原に向かいあった。
「私たちも、紙面で、長期にわたってキャンペーンをする計画です。いろいろと知恵を貸して下さい」
畳職人に似合わぬ陽焼けした頬に一瞬、ピリッと光が走り、すぐになごんだ。
「ま、わしらはわしらでやる。新聞はアテにしとらん。だけどな、資料は、いうてもらえば、出してあげるよ」
考えようによっては、ひどく突っ放したことばである。だけど、ベタベタもたれてこられるよりは、ずっと信用できそうな気もする。
(この男が民商だとしたら、男のデータを使った新聞はアカ攻撃されるかもしれない。しかし、そのデータが事実なら、どんな非難もハネ返せるはずだ)
戸波は、金原の瞳の奥にあるものを確かめる勢いで、そのやせた顔に目をやった。
意気ごんでいるわけではない。むしろ気負いのカケラもない。しかし、いやそれだけに金原の仕草には、どこか目にみえぬ確かさがある…。
玄関口すれすれに自転車がとまった。まるでサーカスのように、ヒラッと飛びおりたズボン姿の中年の婦人が足早に入ってきた。
「あ、金原さん、おられましたか」
婦人は、戸波たちに会釈すると、すぐ眉をひそめ、ささやくように話しかけた。
「今晩の連合自治会、もめそうですよ。わたしらの五丁目町内会を除名せい、いう動議が一、二丁目あたりから出るんやて」
「ふうん」そんなに驚いた様子もなく、金原は煙草に火をつけた。
「おおかた、兵庫製鉄の手が回ったんじゃろ」
「こないだの公害アンケート、町内会ニュースに書いて告知板に貼り出したでしょ。あれはけしからんいうて、連合自治会のボスがわめいているって…」
金原は、うっうっうと、ノドの奥で笑った。独得の冷笑だった。
「自治会新聞にも転載する話がついとったが、それじゃ無理やの」
「金原さん、笑うてる場合やないがネ」
「はじめから、こうなることはわかっとったんや。どうせ、自治会長が有野やからな」
有野——どこかで聞いた名前だ。
戸波の神経が揺れる。
「有野、というと、たしか…」
「うむ、報徳工業の社長よ」
金原は、婦人に戸波たちを紹介すると、ぶっきら棒に答えた。
兵庫製鉄の下請け会社の中では、最右翼であろう。戸波にとっても、堂本敏夫の解雇問題でわたりあったばかりの会社だ。
(そこの社長が、地元の連合自治長か。うまくできてるな)
松岡が膝を叩いた。
「そうすると、例の公害防止協定で立入り検査するという住民代表のメンバーに入っていた人物のことですね」
「そうよ」
金原の口調が、はじめて投げやりになった。
「下請け社長、自治会長、市会議員、それに公害監視住民代表。筋書きが、できすぎてるわけよ」
「……」
「まあね、それでも打つ手はある。ないと思うたら負けじゃ。なあ、奥さん」
金原は、もう一度、例の冷笑を洩らした。居直りか、自信か、戸波には見きわめがつかぬ笑みである。
「まあ、それでも一昔前に比べりゃ、大分マシになった。記者さん、ときどき様子を見に来ることやな」

駄菓子屋、町工場、貸本屋……いかにも下町らしい表通りの角を曲ると、もう兵庫製鉄の表門へつづく金網だった。指折りの鉄鋼メーカーの玄関にしては、いかにも古めかしい。しかし、その古風さが、企業の歴史の伝統と、根強く幅広い組織を思わせた。

道路をへだてて、背の低い門構えをじっとみつめると、なぜかいいようのない圧迫感がのしかかってきた。

しかし、それも数十秒だった。

思わぬ出来事が、戸波の心臓を揺さぶった。

植込みを隔てた玄関に、細川亜紀子が、つづいて石津支局長が現われたのだ。

二人は、車を待つ様子で、なにか親しそうに談笑している。

（なんということだ）

松岡に知らせるのも忘れて戸波は立ちつくした。自分の眼が、信じられない…。

社屋の中から、すぐにもう一人の巨漢が現われた。総務部長の花房圭之助だ。

花房は、支局長に深く頭を下げ、支局長も同じポーズで応えている。

（これは、どう解釈したらいいのだ）

こんどは支局長が亜紀子に何か話しかけ、亜紀子が優雅な微笑を返しているのが見える。

戸波の中で、なにかがガラガラと音を立てて崩れた。

（つづく）

またもトラックが走りぬけたばかりの道路は、もうもうと赤茶けた砂煙だった。

秋の陽は、傾きかけている。

「どうや松岡君、せっかくやから、いちど兵庫製鉄の表門を通って帰ろうか」

連載小説〈最終回〉

曲線ハイウエイ

武田繁太郎
え・横塚繁

浜名湖は、東名神高速のほぼ中央に位置している。ここから、東京方面へも、関西方面へも、どちらへでかけるにも便利な地点であった。

〔あらすじ〕 東名高速サービスエリアで**多木洋介**は神戸の女性**宇津康子**と知合い、逢瀬を重ねるうちに康子にひかれていった。ある日友人**岡本和彦**と共に神戸へきた多木は康子に会えず、彼女の面影に似た**辰野英子**を紹介され、六甲山へドライブに出かけた。ロマンティックな情景に誘われて英子を抱きしめた多木の胸に、初めて感じるいとおしさがつのり、その夜二人は愛しあって別れた。

そんな時突如として康子から電話があり、多木と康子は二人の愛を確かめあった。翌朝、風のように去っていった康子を追い神戸にきた筈の多木は、岡本の早呑み込みと神戸の雰囲気の中で英子を捜している自分に気付いた。英子をみつけた多木は淡路島へのドライブに出かけたが、その帰りに中年の男と寄りそって歩いている康子を目撃した。その衝撃を負って帰京した多木のもとに康子からの屈託のない電話が入った。十日間の休暇をえた多木は、北海道へのドライブに康子と出かけ、札幌から海岸沿いの国道を通り、さいはての村島牧に向った。その村は、難病にかかった象の花子が温泉で開病していることで、かつて新聞に報道されたことがあった。

島牧についた二人は、花子を見舞い花子の世話をしているS氏と親しくなった。S氏を招いて夕食を共にし、動物談議から愛と性へと話は発展した。二泊して二人は帰京した。帰京した多木に英子から電話があり、東京へ遊びにいくという。OKした多木は、新幹線東京駅まで出迎え、二人は若者の街、ジョウジの夜を楽しんだ。その夜、多木と英子は久しぶりにたがいの愛と性を燃やした。

三日後、英子は帰神した。コーポに帰った多木は東京を離れる決心をし部屋を整理した。その時康子から電話があり、東名高速の浜名湖サービスエリアで逢う約束をした。約束の時間より二時間も遅れた康子に、多木は疑惑を持った。

翌日、二人は、多木のクルマで、ドライブすることにした。小半日、どこかをまわって、もういちど、館山寺までもどってこようというのである。

「富士か、箱根あたりへいかない？」

康子は言ったが、多木は、東の方面にはもう興味がなかった。
「それより、名古屋から伊勢のほうへいってみないか」
「西へいくの？」
こんどは、康子のほうが気がすすまぬらしかった。多木は東をいやがり、康子は西をいやがり、どちらも、自分の地元のほうは避けたがっていた。
「いや。西といったって、伊勢は南のほうだぜ。志摩半島のほうまで足をのばして、気がむいたら、今夜は志摩のどこかに泊ってもいいじゃないか」
「それも、そうね」
康子は妥協した。東行きには、それほどこだわりもみせなかった。
康子のクルマは、ホテルの駐車場にあずかってもらうことにして、二人は、昼まえ、多木のクルマで館山寺のホテルをでた。
MVは、三ケ日ICから、下り線にでた。ハンドルは、多木がにぎっていた。MVは、たちまち百二、三〇キロのスピードで、東名高速を西にむかって突っ走っていった。
このときまで、多木は、康子に言ったとおり、この日は、伊勢方面にドライブするつもりでいた。今夜は、志摩に泊り、明日、館山寺にひきかえしてきて、そのときの気分で、あと一日二日、康子とすごしてもいいと考えていた。
東京をでるときから、多木は、そのつもりであった。三日でも四日でも、この女とさいごの逢う瀬をたのしんだうえで、別れるつもりであった。なにも言わずに、彼女を神戸へ帰してやるつもりであった。
だが、このさい、さいごにただしておかねばならなかった。この女との愛の歴史を、おぼろなまぼろしのままでおわらせないためにも、ぜひただしておかなければならなかった。わりきれないままに別れるのでは、自分が少々みじめすぎるように、多木には思えた。

「昨日、君が遅れてきたのは、でかけるとき、きゅうに来客があったからだって言ってたな？」
多木は、たずねてみた。
「ええ。そうよ」
康子も、うなずいた。
「女の客だって言ってたね？」
「ええ」
「親友？」
「まあね」
「そのひと、ぼくたちのこと、知ってる？」
「知らないわ。話してないから」
「じゃ、君、こまったんじゃないの？　よくでてこられたな」
「そこは、まあ、なんとか口実をつくったのよ」
「そおか」
多木はうなづいてみせたが、むろん、来客が女だったとは信じてはいなかった。彼は、クルマのスピードをいちだんとあげながら、話題をかえるように言った。
「このまえ、君が東京にきたとき、君は急用ができたと、いそいで神戸へ帰っていったね？　おぼえてる？」
「むろん、おぼえてるわ」
「あのとき、ぼくは、未練たらしく、君のあとを追うように、クルマで神戸へいってみたんだよ」
「まあ――」
はじめてあかされた事実に、康子は、思わず息をのんだ。
「むろん、神戸へいったって、君の住所も電話番号も知らん。だけど、神戸ってそんなに広い街じゃない。どこかで、ひょっくり君に逢えるかも知れないと、ぼくは、にぎやかそうな町筋を、あてもなく歩いてみた」
康子は、つぎの言葉を、やはり、息をのんで待っていた。
「三日目の夜だったかな。神戸の街は、ぼくの期待に応えてくれた。あれは、たしか三宮だったと思う。ぼく

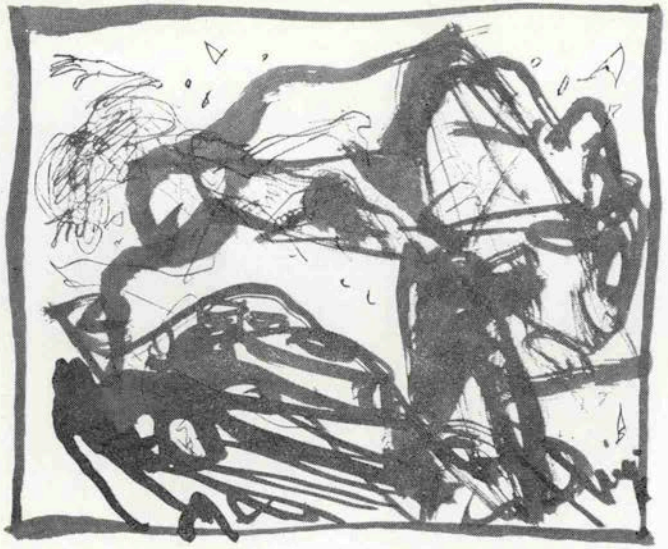
は、君を探しあてることができた。クラブらしい建物にはいっていく君の後ろ姿を、ぼくはみつけたんだ。そんな記憶、君にはないかい？」

康子はこたえなかった。じっとフロントガラスをみつめたまま、黙していた。

「昨日きたのは、女客じゃなかった。ぼくの想像がただしければ、あのとき、君と連れだって歩いていたひとだった。そうじゃないのか」

康子は、肯定も否定もしなかった。否定しないことが、多木の想像があたっていたことを、暗黙に認めていたといっていい。康子の態度は素直になっていた。

「よし。わかった。ぼくは君を責めているんじゃない。責める権利など、ぼくにはない。だから、ぼくはいままで、神戸で君たちをみかけたことも黙っていた。だけど、ぼくは、君がどういうひとかということだけは知りたかった。二人がめぐりあったその思い出のためにも、ぼくはさいごに知っておきたかったんだ」



さいごに、という多木の言葉に、康子は、ふいに目をひからせて、多木の横顔を垣間みた。彼女も、やっと口をひらいた。

「昨日、あたし、もう二度と神戸には帰らないつもりでてきたわ」

「そのひとと、なにかあったんだな？」

「昨日は偶然。でも、あなたとのことが、いつまでも秘密でいられるはずはない。いつかはこうなると思っていたわ」

康子は淡々とした口調で言った。悔いも恨みも感じさせない。そのさめた態度に、むしろきっぱりとした覚悟のほどがこめられているようであった。

相手は、どんな男か。神戸に住んでいる貿易商か。それとも、神戸の外国商社の駐在員か。あるいは、どこかの国の船乗りか。さまざまに想像できるが、しかし、そんなせんさくは、多木にはもうどうでもいいことだった。その男との歴史も昨日で終焉してしまったのである。

「あたし、昨日、こっちへくる途中、ふっと考えたの。これから、東京であなたといっしょに暮そうかって。結婚なんかどうでもいい、あなたと二人なら、たのしいだろうなあって、ちょっとそんな空想もしてみたのよ。だけど、すぐそんな考え、捨てたわ」

多木は黙ってきいていた。

「だって、あなたの性格、あたしにもすこしは理解できているもの。あなたには、あたしと暮そうなんて気持ち、あるはずがない。そう思うと、あたし、なんて馬鹿なことを考えたのかと、自分でおかしくなったわ」

「君、独りだったね？」

「そうよ」

この女には、もう家も肉親もない。自分と別れれば、文字どおり、天涯孤独の身になってしまうのだ。これか

ら、この女は、どこへいって、どんな生き方をしようというのだろうか。多木には想像できなかった。彼が、康子と三、四日さいごの逢う瀬をたのしんで、それから別れようという考えを捨てたのは、このときであった。彼は、はっきりと捨てた。そして、新しい決意を抱いた。

「君、ぼくとこうして知りあったこと、悔んでいないかい？」

「悔んでいるはずがないじゃないの。あなたは？」

「おれだってそうさ」

「じゃ、あいっこね」

康子は、多木の左肩のあたりに、長い髪のあたまをもたせかけてきた。

「どうだい？　これからも後悔しない？」

「もちろんよ」

「ぼくとどうなっても？」

男の肩にあたまをよせたまま、康子は、こっくりとうなずいてみせた。

「そうか。わかった」

多木もうなずきかえしながら、そのときが、彼自身の予定をとびこえて、意外の身ぢかさで迫ってきたことを、多木は意識した。多木の脳裏に、亡くなった兄の面影が浮んでいた。兄は、試作車のテストドライブ中、急カーブをまがりそこなった。操縦ミスか、試作車の欠陥か、わからなかった。わからぬまま、クルマはガードレールに激突し、炎上する車中で、兄は死んだ。壮絶な最期だった。その兄の死に、多木は、ぞくぞくするような魅力をおぼえた。

東名高速は、ゆるやかな起状をみせながら、一直線にのびていた。多木は、フロアいっぱいにアクセルを踏みこんでいた。MVは百六、七〇キロの猛スピードで暴進していた。アンテナだけが、キーンと鋭い金属音をひびかせていた。行手に、曲線がみえてきた。曲線は、そのまま、赤いトンネルにすいこまれていた。その曲線のハイウエイを、多木は、さいごのスピードをあげながら突っ走っていった。康子は、多木の肩に顔をあずけたまま、うっとりと両の瞼をとざしていた。多木は、右手一本でハンドルをにぎり、左腕を康子の肩にまわして、その上半身を抱きよせた。

トンネルの入口が、曲線のむこうからせまってきた。それは、むこうからとびこんでくるような速さだった。その入口の右端の壁にむかって、多木は、猛スピードの愛車を突っこませていった。

（完）

□新しい関西を創造する総合雑誌

オール関西

〈4月号予告〉

☆ グラビア「女の四季」藤川延子
〃　「万葉記」⑬ 犬養　孝
〃「And His Ladies」猪田七郎
〃　「しにせの心」
☆ この人この時 佐伯達夫他
☆ 連載対談 ㉟　田辺聖子
サトウサンペイ
☆ 特　集「大阪・ナンバ」
〃「自治体に聞く」神戸市ほか
☆特別企画—宝塚歌劇団60周年—
—井植文化賞受賞発表—
☆ 「織田作之助伝」㉖　大谷晃一
☆ 戯　曲「東　山」　伊藤邦輔
☆「大阪ものがたり」⑧ 石濱恒夫
☆「夕ぐれに苺を植ゑて」⑦
足立巻一
☆ 小噺エロチカ　大門　克
☆ 「現代と伝統」④　吉田光邦
☆ アラブ大使の声　林　辰彦

月刊オール関西編集部
大阪市北区梅ケ枝町80　梅新東ビル7階
TEL　06—364—2434～7